多紀事蹟　單

H 20
381

多紀家ハ、もと丹波國多紀郡より出つ。名醫丹波康頼の裔より。『一代要記』に拠れハ、『天元五年、針博士丹波朝臣康頼ハ撰医心方三十巻』とあり。又系譜を掲げて

丹波康頼―重明 錦小路本作重雅―忠明

雅忠 寛治二年卒―重康―重基 一本雅忠の子

重忠 一本雅忠の子―重成

知康

「天養二年二月の条に、醫博士丹波知康、重成の名あり」医心方第八

「又按に康頼ハ延喜十三年生、長徳元年四月二

東京帝國大學圖書
B 23475

十九日歿す。享年八十四。

その後数世を経て、元泰といふ人、金保氏と改め、本家の丹波と氏を異にした。これは東照公の時代のことで、元泰は公に召されて口科ではあつた。其の後数世を経て、元孝（玉池と号す）の時、氏を多紀と改め、口科を捨てて内科となつた。躋寿館（医学館）を始めて設けたのは此の人である。此の事は医学館の記に載す、其の子永寿院（名は元徳、字は中明。藍渓と号す。初名仲通安元。享保十七年壬子に生れ、享和元年辛酉没す。享年七十）父の遺志を継いで益々学館の規模を拡張し、一旦火災に遭ひて校堂悉く烏有に帰したるも、藍渓は財嚢の底を払つて再び之を建築し、斎つて子弟の薫陶に力を尽された。安永三年甲午擢でゝ侍医に任ぜられ、法眼に叙せらる。時に年四十三。天明七年丁未法印に昇叙せられ、永寿院の称を賜はる。時に年五十六。楽翁侯の老中たるや、革新を以て自ら任と為す。藍渓その議に与かり、医官の旧弊を一洗せしめ、面目悉く改まる。藍渓又官許を得て製薬所を設け、進用の薬剤に佐ふ。又官命を受けて学館の規模を拡張し、

十行 廿字 東京相馬屋製

改革を加へ、家塾を改めて国学と為し、藍渓之の教授に任せられ、幕医の子弟をして悉く就学せしむ。是に於て官より毎歳百両を賜うて学館の維持費に充て、藍渓には従来の二百俵三十人扶持の外、別に三十人扶持を賜うて其の労に酬ひ、子孫永く学館の総裁たらしむ。藍渓、十代、十一代両将軍に仕へ、謁見ならびに摂生の方法を述べ、又之を書して献じ、寛政十二年庚申、病を以て致仕す、時に年六十九。翌享和元年辛酉五月十四日歿す。著す所、医家初訓、広恵済急方、養生大意。

十行 廿字 東京相馬屋製

医学平言あり。此の人、病を未然に防ぐを以て旨と為す。宛も古の扁鵲に似たりといふ。

藍渓の子は則ち更に一層有名なる多紀桂山なり。桂山、名は元簡。字は廉夫、通称は安長、桂山は其の号なり。又櫟窓と号す。宝暦五年乙亥を以て生る。大田錦城より長ずること十歳なれども、(錦城の明和二年乙酉生れ、文政八年乙酉歿す。享年六十一)二人頗る相好く、其の記臆の絶倫なることも亦相似たり。嘗て前田侯の左伝注疏に一枚の落丁あり。錦城直ちに筆を執りて之を補ひて悉く

語訓に依り、本文は勿論、杜注、孔疏に至るまで一字の所在を誤らざらんため。桂山も亦之に同じく寛政二年庚戌。樂翁侯の召すに召されて一医事の難問を提出せられてゐたるも、桂山直に三十餘条を解決して毫も躊躇せず。侯頗る感嘆して俄かに擢でゝ、侍医に任じ、法眼に叙す。幾もなくして又学館の教授を兼ぬ。寛政十二年庚申、父藍渓致仕し、桂山其の禄を襲ぐ。時に年四十六。乃ち学館の總裁となり、且つ旧に依て侍医となる。其の後、享和二年壬戌、医官詮選の際、議論旨に逆ひて侍医を

一読すれば

終身忘れずといふ

罷められしめしが、桂山乃ち力を著述に用ゐ、其の著はす所、素問識。霊枢識。傷寒論輯義。金匱述義。櫟窓類抄。觀聚方。医賸。脉学輯要。挨穴輯要。麻疹輯要方。提中鏡。扁倉伝彙考。聿修堂蔵書目。聿修堂読書記。素問解題。廣蘇考。病名沿革考。奇方畧論。日光駅程見聞記。病名纂。本朝經驗方。救急選方。脚気論。等頗る多し。桂山は水戸侯の外觀的輕症の病を視て其の易簀の期の目前に迫れるを知りたるを以て、は扁鵲的の神医として術名を尊崇せしめた一例である。

桂山、書生を愛し、之を保護せり。海保漁村翁の如きも其の若徒の一人なりつと。桂山、錦城に請ふて其の学僕たらしめたりと云ふ。桂山、文化七年庚午十二月二日歿す。年五十六。

桂山に子あり。長を柳沜（字）といひ、次を蘿庵（字）といふ。名柳沜、寛政元年己酉生れ、文政十年没す。年三十九。其の子瞻湖継ぐ。（文化三年丙寅生れ、安政四年丁巳十一月歿す。三十九歳。通称安良）

多紀元堅、字は亦柔。蘿庵。又は三松と号す。楽真院といふ。氏の人なり。寛政七年乙卯生れ、安政四年丁巳二月十四日歿す。享年六十三。幼時、父の家に在つて頗る腕白で、常に犬を使嗾し闘争せしむることを遊びを楽みとしたり。一日、塾生が彼れに向つて『あなたのお父様も御祖父様も、アノ通り豪いお方であるのに、あなたは、ナゼソンナ事ばかりして入らつしやいますか』と誡めたり。之れに元堅は傲然として『馬鹿を言へ。乃公は今に豪いお医者になつて見せる』と答へたと云ふ。後別家して、御めい本石町に住し、後矢の倉に移つたり。故に継新の少し前みに本家を継ぎて柳橋の多紀といひ、

十行 廿字 東京相馬屋製

別家を称して矢の倉の多紀と云つた。茝庭また幕府へ召出されて、本家と同じく二百俵三十人扶持を給せられ、侍医に任ぜられ、法眼に叙せられ、又進んで法印に進み、楽春院と称した。又医学館の教授を兼ねた。抽斎の最も親交したのは多紀一族中では此の人である。茝庭学問該博なり。殊に治療手巧にして回生起死の術妙なり。茝庭常に医は仁術なりとの語を体し、如何なる貧家へでも、喜んで其の需に応じ、

『ヤン、それらは蒲団の良いのを持つて居らぬならよろしく今直ぐに持たして寄越すのだ、左様心得ろ』

といふ語を遺して帰る。帰れば直ちに一組の結構なる夜具蒲団を贈り来る。又蚊帳が無くて困れば、

『ヤン、それは蚊屋では病人のためにならぬ』

忽ち新しき蚊帳を寄贈する。又甚だ貧しき患者には三両乃至五両の金を与へて了ふ風であつた。茝庭多紀楽春院の名は天下に喧しく響き其の勢ひは諸侯の及ばぬ程であつた。

著はす所、素問紹識。時還読我書。傷寒論述義。金匱述義。診病奇侅。雑病広要。薬治通義。女科広要等あり。

楽真院の嗣子は、即ち安琢、号は養春院であつた。此の人が、父に似て居る流儀で、父（抽斎）の宅へ来れば案内もなく書斎の前へ入り来つて、写字中の父を見て「多紀安琢」と大喝一声しながら障子を開く。

私は父の遺言を奉じ、素問を研究する為めに、養春院の門に入つた。養は楽春院の家風、弟子養春院に訪れへまゐりし時の待遇に楽春院時代の通りあらんと思はる、故に左に之を許す。

（第二）養春院が他から帰り来て、従者に「只今帰り」と大声して之を報ずれば、五六十名の生徒は急く塾から飛ひ来つて、敷台、又は庭への上へ降りて、最敬礼を施す。先生は毫も会釈をせずに、優々と其の中を通りけり。

（第三）先生は相撲が大好物で、庭の一方に土俵が築きあり、毎日少なくとも生徒をして悉く裸体になつて力を角せしめ、観て以て無上の

十行 廿字　東京相馬屋製

快楽であります。我々のやうな小児どもでも、所
坐せさせまする。
（第三）塾生間に蒲団攻めの慣例あり、不良の
ものあらば、ものに推倒して其上へ十数枚
の蒲団をかぶせ、其の上へ多数が乗ることを
苦める。
（第四）先生は尊大であるけれども、頗る寛大、放任主義
で、塾中は終日席を取り放しで何でも一切
構はなんだ。
（第五）私は明治四年に国から上京したが、足掛

け四年振りで先生を尋ねると、先生は個人の
境遇で何つて子も拘はらず、旧に依て尊大で、
「ソチラも達者（健在）か、替はることもあるまい」
とあしらひ、
「私も近頃は窮して居る。併し謙之助（海保漁村の甥）は
今は大学校文部で、良い身分になつて居る。
謙之助は能く私を世話をしてくれる。昔を忘れ
んで、感心な奴だ。ソチラもあの謙之助に遇
つたら、私から「好い如く世話して呉れて居
ると申してくれ」

あなたと言つた。私が竹逕先生に逢つて、その通
りを傳言した。これには先生は笑つてしまうた
まだしもいつてた。
（第十六）それでも門下生であるものゝ子にも其
の頃は丁寧であつた。終吉の父の脩竹腰之の
出入した富田屋といふ砂糖屋に在つて喘息に
悩んで居た時、私はその依頼を受けて養春院
に往診をさせた。養春院は私に對して、尊
大に於て腰之も脩に對しては頗る丁寧であつ
たさうな、

（第十七）私の家へ来る客で、高い菓子臺へ茶碗を載
せそれへ蓋をして出し、又菓子と言つても盛
りてだしたものは、大名の外に法印の位に在る
多紀などばかりであつた。それで見ても侍医
の中でも法印といふものは、餘程勢力のあつ
たものである。成程其でも外は地位ではあつ
たが、代の待遇は無きもんだ。
同じ侍医でも、伊沢磐安法眼や、辻元崧春院
法印などは對しうしたことはなかつた。

私は元の頃、養春院さんと度々相撲をとりつ
ころれは特別に優待しとのことにてありて
ありつこと、想ふに先生は拙者の門人でありつくる
にあるなり。

多紀藍溪

藍溪は徳川幕府の医員にして名は元悳、字は仲明、安元と称す。名医丹波康頼の裔なり。高祖元泰自ら族を別ち金保氏とす。始め口科を以て家康に仕ふ。父元孝に及びて請ひて今の姓に改め内科に復す。藍溪少にして氣を負ふ、先世の業を振興せんと欲す。其張介賓の方を好み、後、長沙に溯る。其術益精し。初め元孝、学舎を設け講習の道を廣めんと欲し。新に濟壽館を創む。藍溪遺志を継ぎ、更に之を開拓す。規模大に具る。安永年中、侍医に擢でられ

十行 廿字 東京相馬屋製

法眼に叙し、天明の末、號を永壽院と賜ふ。白河侯政を執る。藍溪献替する所あり。官医の宿弊頗に改る。又請ひて製薬所を設け、以て進用の藥劑に備ふ。尋で旨あり。家塾を轉じて國学となす。大府の爲めに一盛典を起つ。皆藍溪の功なり。別俸三十口、歳支百両を賜ふ。藍溪、家治、家斉の二將軍に歴仕し、進見する毎に、攝養の方を面陳し、或は其記を録し以て進む。肯て言ふ。我の職たる豈に止だ病を候し剤を處するのみならん。平時、調護預め病源を防ぐ此を要務となすと。後、病を以て致仕す。享和元年五月十四日歿す。年七十。藍溪兼て琴を善くす、初め小野田東川に就きて越師の琴法を受け、生藍の称あり。幸田親益、設樂純如、杉浦梅岑と名を斉うす。其著に、廣恵濟急方、医家初訓、医方挈領、医学平言、養生訶等あり。

（帝国人名辭典に據る）

12 櫻川町一山形屋製

多紀藍溪

德川幕府の医員なり、名は元德。字は仲明、安元と称す。藍溪は其號なり。始め元孝家居を設けて講習の道を弘め又濟寿館を建つ、安永中、侍医となり法眼に叙せられ天明中、法印にすゝむ。此時永寿院の號あり。白河侯の執政の時、学政に参与し皆用いらる。享和元年五月没す年七十。

（栗島女史日本人名辞典に依る）

○元悳、元德何れが正しきか未考、貴殿御考案を乞ふ

12 櫻川町一山形屋製

多紀桂山

桂山は徳川幕府の医官なり。名は元簡、字は廉夫。安長と称し。又櫟窓と號す。本姓丹波、父藍溪の業を受く。資性絶倫、一覧すれば終身忘れず。寛政二年執政白川侯召して医事の能を試む。桂山三十餘條を剖析す。侯大に其精博を称し、俄に侍医に擢で法眼に進む。尋で医学教諭を兼ね、十二年父致仕す。乃ち禄を襲ひて館教を統ぶ。侍医故の如し。享和年中、医官を銓選す。是時議論旨に忤ふを以て侍医を罷めらる。是に於て退きて力を撰述に用ゐ。當世の耆宿、皆弟子の禮を執る。

12 櫻川町一山形屋製

又治術大に行はれ門前市をなす。性高雅、利勢に澹なり。酷だ読書を好む。凡そ古今の文字、苟くも素の医事に渉るものは悉く其根柢を推して之を究む。是より先き諸家五行經絡の説を厭ひ、各々論著する所あり。故を以て措啟一ならず。互に相詆毀す。而して大抵臆測の説のみ。桂山の書出で、海内医籍を講ずる者適従する所を知り、前世粗笨杜撰の風始めて熄む。文化七年十二月二日歿す。年五十六。桂山兼ねて井上金峨に学びて儒学に通ず。其著に、櫟窓類抄。素問識。靈樞識。傷寒輯義。脉学輯要。挨穴輯要。扁倉傳彙考。痧疹輯要方。觀聚方。聿修堂架藏志。文集。櫓中鏡。日光驛程聞見記。聿修堂讀書記。病名彙纂。素問解題。屠蘇考。本朝經驗方。救急選方。医賸。疑脚氣論。病名沿革考。医略抄。金匱輯。奇方彙編等あり。

（皇國名医傳、續近世叢語、近世名家著述目録等に據る）

櫻川町一山形屋製

多紀元堅

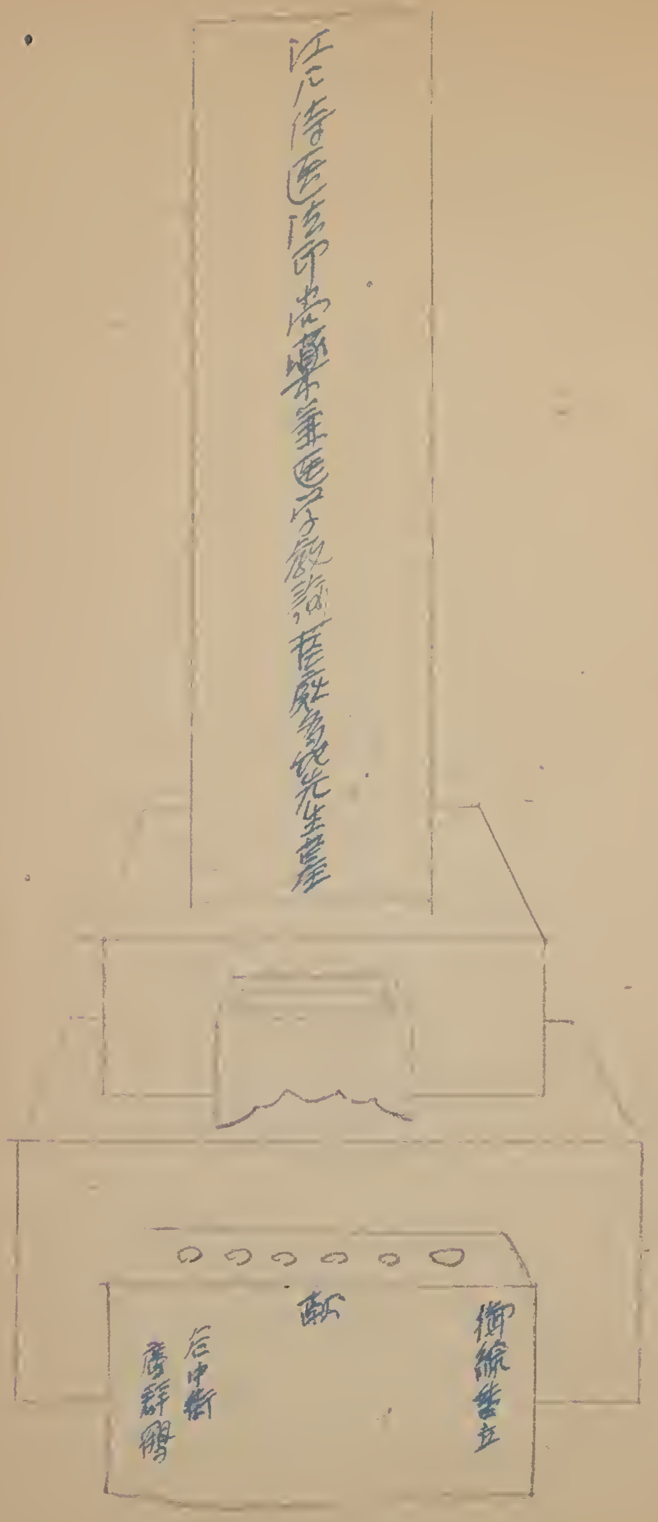
元堅は德川幕府の醫官なり。元胤の子にして亦高才あり。後つて坊間に居り別に医業を開く。治を乞ふ者麕集す。後、西丸の侍医に擢でられ、法印に陞る。

（續近世叢語）

12 櫻川町一山形屋製

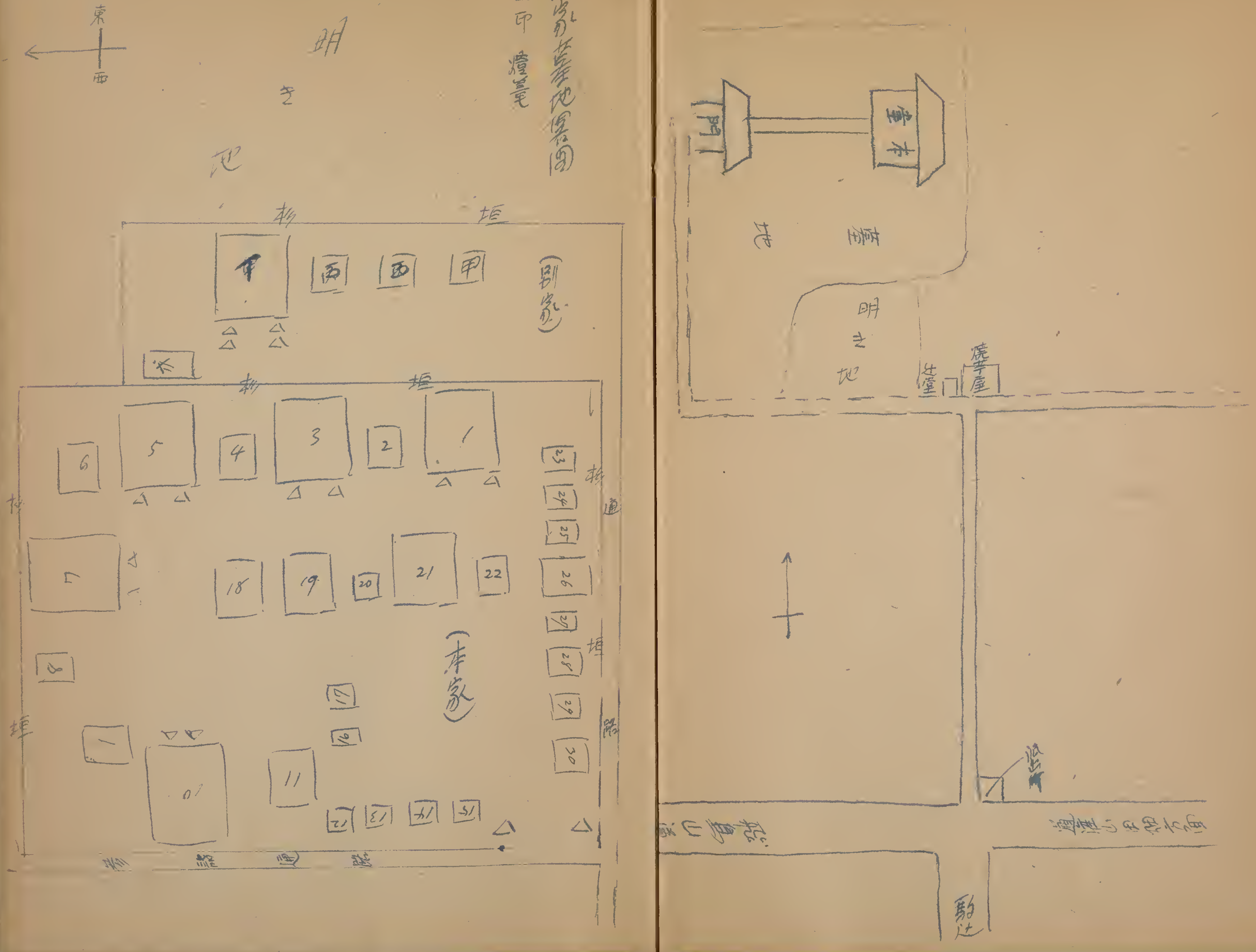
多紀藍渓墳墓

北豊島郡滝野川村字　城官寺



多紀家墓地略図

△印 燈籠



1. 故侍医尚薬兼督医学事永寿院法印元悳多紀先生墓（三面有文）

2. 多紀夫人松井氏墓

3. 督医学事法眼前侍医尚薬桂山劉先生之墓（三面有文）

4. 多紀孺人山形氏墓

5. 故医官督学事法眼柳沜多紀先生墓

6. 多紀孺人杉本氏墓

7. 江戸侍医督医学事法眼暁湖多紀先生墓

8. 長壽院清見貞観大姉
明治廿六年
三月六日

9. 多紀孺人吉田氏墓

10. 江戸侍医法印督医学事多紀棠邊先生墓　元佶、安常

11. 桂陰多紀先生
孺人柴田氏之墓　安洲

12.

13.

14.

15.

16.

17.

18. 大莫醫先生之墓

19. 多紀婦人小見山氏之墓

20. 孫子全松之墓（元簡ノ子ニシテ医官多紀筠階撰並建ノ銘アリ）

21. 東都故法眼侍医元恵多紀先生墓

22.

23.

24.

25.

26.

27.

28.

29.

コノ一郭ノ東裏手ニマタ一郭アリ入口正面ノ分ヨリ順次ニ記セん

甲.

2. 雲従劉（リウ）先生之墓　元琰ノ坊誌

丙、多紀孺人望山氏墓

丁、江戸侍医法印尚薬兼医学教諭茝庭多紀先生墓

戊、丹波千多之墓

茝庭ノ墓ノ前ニ燈籠二対アリ一ツノ台ニ

安政六年巳未歳□□

進献参謀元□等辞事

ト刻せり

玉池 ― 藍溪 ― 桂山 ― 柳沜 ― 暁湖 ― 雲達 ― 桂居

桂山 ― 茝庭 ― 雲従

鉄郎

晴 ― 助

多紀代々の傳は料ちて辭記すべし

醫学館（躋壽館）は、初め多紀元孝（享保十七年壬子享和元年辛酉。七十）が醫学講習の道を廣めんと欲し、官に請ひて、城北天文臺跡に設けたるものにて、當時は全く多紀の家塾で有（あ）た。其の子永壽院（名は元徳又元悳）藍溪と号す。初め通称を安元といひたり。（享保十七年壬子―享和元年辛酉。享年七十）。父の遺志を継ぎて之を擴張す。時に樂翁公執政たり。躋壽館を改めて國学と為し、藍溪を以て館主、兼教授（講師）に任じ、別俸三十人扶持と每歳百両とを賜ひ、世々館主たらしむ。永壽院

の子安長（名は元簡。桂山と号す。寶暦五年乙亥―文化七年庚午。享年五十六）。又嫡子たりし時より既に医学館の講師たり。寛政十二年庚申、父の致仕するや、其の後を襲ぎて館主と為り、館務を總理す。爾来代々多紀家、館主と為り、講師を兼ね、後に記すべき医学館講義公開の際ハ多紀安良（曉湖と号す。文化三年丙寅―安政四年丁巳。享年五十二）館主兼講師たり。當時の世話役ハ左の如し。

世話役

濱町入江橋角　小川龍仙院

同所元矢ノ倉　多紀樂眞院

湯島妻戀坂下　野間玄琢

神田新シ橋内　多紀安良

濱町末廣稲荷前
矢部源七郎借地　田中俊哲

同　手傳

本郷一丁目横町
御持組借地　井上元亮

下谷立花左近将監西門前　勝本理庵

小石川牛天神下立慶橋通
梅村藤十郎借地 父太安同居　谷迎道玄
虎門外 父雲悦同居　森雲禎

○嘉永二年己酉十二月二十二日
一多紀安常役医学館へ願出、安良勤方見習仰付
昨二十一日但馬守殿遠藤より御渡。

○醫学館講師

醫学館講書の始めて公開になつたのハ、天保十四年癸卯十月の事である。當時の布告、即ち所謂「公義御書付」なるものハ左の如し。

醫学館に於て講書等有之候間、陪臣町醫等勝手次第罷出、聴聞可致候。尤委細之儀者、醫学館へ可承合候。
右之通可被相觸候。

此の布告の出た翌月、即ち十一月十六日、左の人々が講師を命せられた。

本草綱目　水戸殿お家来　佐藤平三郎
（水戸殿お用ありて出勤せず。）
難經　建部内匠頭家来　辻元崧庵
（此の人は、既に将軍に謁見し、且つ従来醫学
舘の講師であつく。）
傷寒論　阿部伊勢守家来　伊澤長安
素問　松平遠江守家来　高井玄益
（此の人は、既に将軍に謁見せり。〇病気にて
出勤せず。）
金匱　太田摂津守家来　山本順庵

十行　廿字　東京相馬屋製

靈樞　町醫師　清川玄道
（既に将軍に謁見す。）
右の外、左の御目見醫師（既に将軍に謁見
せる醫師）三人、交互に一人づゝ出席講書
を命ぜらる。
松平讃岐守家来　橋　尚賢
松平下總守家来　溝部有山
町醫師　松本良甫
天保十五年（改元弘化）甲辰三月七日、講師
を命ぜられたる人々

靈樞　津輕大隅守家來　澁江道純
素問　町醫師　坂上玄丈
此の日、高井玄益、清川玄道、病氣に付き、依願講師を免せらる。
同年七月五日、左の者、講師を命ぜらる。
本草綱目　戸田采女正家來　江馬春齡
同月○日、山本頤庵、病氣に付き、依願講師を免せらる。
同年八月十一日より、辻元崧庵既に兩回難經を講じ畢つて金匱に着手す。

十行廿字　東京相馬屋製

弘化二年乙巳七月二十八日、江馬春齡、依願講師を免せらる。
同年十一月十日、左の者、講師を命ぜらる。
本草綱目　松平三河守家來　井岡友仙
同三年丙午八月六日、辻元崧庵、既に兩回金匱を講じ畢つて、同十一月一日より傷寒論に着手す。
同年八月三日、松本良甫、新に幕府へ召出され、百俵を賜はり、小普請醫師を命せらる。

同年十月二十二日、伊澤長安、既に三回、傷寒論を講じ畢つて、十一月十二日より金匱に着手す。

弘化四年丁未正月二十日、辻元崧庵、醫学館講書、年来出精相勤候に付き、五人扶持を賜はる。

同年三月二十六日、辻元崧庵、新に幕府へ召出され、三十人扶持を賜はり、奥詰を命せらる。

同年四月二十七日、坂上玄丈、既に兩回、素

十行　廿字　東京相馬屋製

問を講じ畢つて、五月十七日より傷寒論に着手す。

同年五月十六日、澁江道純、既に兩回、靈樞を講じ畢つて、六月六日より素問に着手す。

同年四月中、左の者、講師を命ぜられ、七月二十六日より出勤す。

難經　松平美濃守家来　稲葉文定

同年十一月十五日、伊澤長安、年来出精に付き、将軍家へ謁見を命ぜられ、十二月朔

目通に謁見す。
嘉永元年戊申の月の日、佐藤平三郎病死す。
同年九月十六日、稲葉文定、既に兩回、難經を講じ畢つて、十月十一日より扁鵲倉公傳に着手す。
同年十月二十三日、左の者、講師を命せられ、十一月二十七日より出勤す。
救荒本草　岡部内膳正家來　井口榮達
同年十月二十八日、橘尚質、講師を免せられ、銀三枚を賜はる。
同年十一月十二日、滿部有山、同上。
嘉永二年己酉三月七日、澁江道純、坂上玄丈、年來医業出精に付き、将軍家へ謁見を命せられ、同月十五日目通に謁見す。
同年閏四月二日、伊沢長安、既に金匱を講じ畢つて、五月十二日より靈樞に着手す。
同月二十六日、稲葉文定、既に扁倉傳を講じ畢つて、五月二十一日より金匱に着手す。
同年十一月二十九日、井同交仙、年來医業出精

に付き、将軍家へ謁見を命せられ、十二月
十五日遂に謁見す。
嘉永三年庚戌、五月七日、井口栄達既に救荒本草を
講し畢つて、同二十七日より神農本草経
に着手す。
同年七月二十七日、坂上玄丈、既に傷寒論
を講し畢つて、八月十七日より難経に着
手す。
嘉永四年辛亥、四月二十一日、渋江道純既
に両回、素問を講し畢つて、傷寒論に着手

十行廿字 東京相馬屋製

す。
嘉永五年壬子、閏二月十七日、坂上玄丈、既
に両回、難経を講し畢つて、三月七日より
金匱に着手す。
同年五月十一日、稲葉文定、既に両回、金匱
を講し畢つて、六月六日より素問に着手
す。
（同年）十一月十七日、伊沢一安（長安改）病死。
同年十二月十六日、左の者、講師を命せら
れ、翌年正月二十七日より出勤す。

霊枢一安政　阿部伊勢守家来　伊澤磐安
嘉永六年癸丑、二月二十六日、左の者、講師を命ぜられ、三月七日より出勤す。

難經　浪人　堀川舟庵
同年四月朔日、井岡友仙、既に本草綱目を講じ畢つて、同二十一日より爾雅釋草以下に着手す。
同年十月七日、堀川舟庵既に難經を講じ畢つて同二十七日より傷寒論に着手す。

十行　廿字　東京相馬屋製

同年
十月二十六日、瀧江道純、既に兩回、傷寒論を講じ畢つて、十一月十六日より金匱に着手す。
同年十一月二十八日、稲葉文定、文貞と改名す。
安政元年甲寅、正月七日、坂上玄丈病死。
同年正月二十五日、左の者、講師を命ぜられ、二月二日より出勤す。

金匱　阿部伊勢守家来　森養竹
同年十月朔日、瀧江道純、既に金匱を講じ

畢つて、同二十一日より扁倉傳に着手し、十二月六日、又講し畢る。

同月十二日、堀川舟庵、既に傷寒論を講し畢つて、同十七日より周官醫職に着手し、同二十七日、又講し畢る。

安政二年乙卯正月二十六日より澁江道純、難經に着手す。

以下記録の存するなし。然れども私の知り得る限りにては、堀川舟庵死して、山田昌榮、講師を命せられ、澁江道純死して、松平肥後守家來（松平右京亮家来）佐藤玄萇、講師を命せられ、伊沢磐安、幕府へ召出されて、町醫師橋宗俊、講師を命せられ、其の後、今川了庵亦講師を命せられたり。

右講師の内にて、辻元崧庵は、字は山松。冬嶺と号す。經を山本北山に学び、医を多紀桂山に学ぶ。名医たると同時に、又詩人としても名あり。此の人は所謂苦学生なり。園中の活物を鬻ぎて、纔に自活の道を立て、又蚊帳を購ふの資なきを以て、蚊羣の襲ふに任せたり。然れども不屈不撓の精神を

十行 廿字 東京相馬屋製

以て遂に一家を成し、天保年間、医学館の未だ公開せられざる以前に在りて、既に講師を命せられ、且つ将軍に謁し、弘化四年丁未三月二十六日、幕府へ召出され、其の後、法眼に進み、又法印に進みて為春院（松政）と称す。諸侯以下治を乞ふ者頗る多く、車馬門に塡ち、弟子両国加より出で入れるもの為春院、毫も城廓を設けず。当時の状態を今言ひて隠さもらしと云ふ。人と為り肥大なりき。

醫心方の影写、並に校正等に、抽斎頗る力を用ゐたるが如く、その病篤きの時、夢中に屢ば六七枚の書を暗誦したるなど、多くは醫心方の数節を朗読したるに似たりといふ。

抽斎の手帳に拠るに、

醫心方全部三十一巻（内二十五巻は上下なり）

嘉永七年（安政元年）甲寅十月十三日出現、同月十五日、書物御用に而、御本物は御代、写本彫刻等之義、此調の上、醫学館へ上京、遠藤但馬守殿より全部御渡に相成候由

とあり。

又拙斎先生の兄岡西徳瑛の詩に

科玉突兀開櫝出　瑩光明澈点斑無
金龍山畔波濤起　龍口如探是此珠

とあるに照して、当時の事情を推知するを得べし。

左に掲ぐる所は、拙斎の手帳中に載するものなり。此参考迄に差上置候、これをいかにも御採用下され度候。

大和守ハ半井ナラン

口上之覚

兼て六郷筑前守様御内ニ御座候、拙祖父大和守代之者ニ御沙汰御座候而、家伝医心方之儀、本書ハ天明八申年京都大火之節焼失仕候、其余写之品ニ而も所持仕候処、世上救民之為め御写も被仰付、右ニ付筑前守へ御沙汰も御座候ニ付、兼而内外題ハ同様ニ御座候へ共、筆者も区々ニて誤字落字も御座候へ共、甚疑しく、全巻ニ御座候ニ付、追而御用ニも相立候様仕度、依之右写御所望全部三十一巻筑前守へ相廻し候 …

（紀州侯ニ御医師　之世大和守廣周）

半井大和守法印也

天明中之人

御覧之外猶委細之儀ハ同人ゟ可申上候以上

十月十三日

右甲寅十月十三日阿部（老中）伊勢守（正弘）殿御宅へ小郷筑前守持参之同人沼辺三太平ヲ以差付御附札医心方全部差上

十月十五日

医心方三十一巻

右医学館へ御下ケ之上来ル写ニ而御用立ニ相成候ニ付右写取彫刻ホト作付の紙ハ御調之上申上

十行 廿字 東京相馬屋製

遠藤（胤統）

但馬守殿ゟ御渡

十二月十四日 但馬守殿御渡

覚

医心方書写并彫刻之儀ハ勤学ニ候様之事ニ候得共右
得尤も御入用金之儀ハ御金蔵ゟ御下ケ相成候
申事彫刻出来之上売下代金ヲ以返納之積手続出来
調候之上相伺可申事

医心方影写程式

一影写之儀字体筆画ハ勿論大小寛狭ト模倣致シ自
己ノ筆意ヲ不加様一心ニ相掛可申事
一原巻天下無二之宝典ナレハ臨模ニ際シ汚墨損壊
等無之様精々心附可申事
一写生出席中世話役ハ常ニ一人相詰可申事
但京都住ノ者ハ時々見廻リ可申事
一写生毎朝九時過出席日ニ各手三頁ヲ出
写ス為ニ退散勝手ニ相成不申事
但一日ニ三頁写算ハ志ハ二頁ツヽ影写又
ハ一日ニ六頁写ハ志ハ次日影休ムモ不
苦候得共総テ出写踈略之儀無之様一心ニ致可申
事
一出写来ル十一月朔日ヨリ始メ同月二十日平均ハ
但日ニ二頁出写之志ハ同月晦日卒業之事
尤モ出写中僅之日限ニテ三八ノ日ヲ休
可申事
一影写中調合役ハ嘉禮新接之志ハ当番斎藤隆ニ
可申事
一影写局之儀ハ旧年寄所執行法眼部尾請所ニ

内々相定ル事

一 出写中猥雑談堅禁ス事

一 筆研墨几ハ筆者持参之筈ニ候事

但有合ニテ出写致外ニハ勝手次第之事

總識 オソイシ 多紀ーーー

多紀ーー法眼 安元子 今叔ナリ

校正 オソイシ 喜多村ーー法眼

三四ー三ナノ 多紀

ヲリアヒ 小島

テ見

安 蒼庵 暁湖

出志 隆

良 元琰ナレ

あ 正 直寛

良 常 安良子ナリ 元佐ナレ

壽 浙

〆三ニ

コンヤ丁一丁目ガザ丁東ウラ
元物多十ヲ西南

渋江 道純

伊澤 盤安 森

養竹

堀川 舟庵

久志本 隼人

喜多村 安貞

ヲリアヒ 宮島 祐庵

寄 立之

小森 西清(倫) テウアヒ

坂本 養碩

十行 廿字 東京相馬屋製

監理　多紀　安常

彤格　宗壽

多紀　安琢

小島　春沂

寫手

久志本隼人　田村元雄　喜多村安貞

森養竹　言屋元順　堀新伯

高島祐庵　宮崎先元　岡田昌春

小嶋抱清　山田業広　坂本養禎

松嶋玄仙　数原善庵　吉田梧鳳

千田宗録

本朝書籍目録

医書

医心方三十巻　丹波康頼撰（雅忠／或作康頼）

医談抄　丹家有靈

丹家ノ曩祖康頼ハ丹波ノ天照社ヨリ出現シタリト申ツタヘタレハ氏ノ神ノ加護ニ侍ケルニヤ彼曩祖ノ医心方ヲ被撰タル千金方ニ

十行　廿字　東京相馬屋製

モ労フベト覚ユル二、ヽシキ博覧ノ輕モ三工
タリ沫ニ凡才ノ所為ニハ覚エズ云々

康頼
永觀二年十一月廿八日撰氏ヵ進公家
長德元年四月十九日逝去歳八十四
(長德元年アリ逆算スレハ延喜十三年生)

医心方傳來書

由題所持之一巻傳来略覽
(瑞策字通庵、沈某京都市所輯) 岡本

先祖曾祖父保晃半井通仙院師ト契約ヲナシ
テ医術ヲ習フ丁十有五年保晃氏一巻之書アル
ナヲミツアコレヲ給ランコト乞フ不許後通仙院
娘産ヲ後難産ニ頓テ下死一生之所ハヲ保晃家傳ノ
薬ヲ与ヘテ其ノ娘ノ命ヲ救フ通仙院保晃ガ医
療ヲ感シテ此書ヲ授与シテ曰是ハ丹家ノ甚為
秘書半井数百年家傳ス此度娘疾病全快セシ
ナコレ偏ニ保晃ガ医療ノ力ニト此書ヲ与ヘシ
ヨリ傳来シテ今由題マデ四代家傳ス又保晃ヨ

リ先祖四代医ヲ以テ業トス今由顕マデ八代ニ
オヨフ
医心方巻第廿二一巻伝云康頼真蹟之ト則ニ
副本アリコレモ二百年前ニ古巻ヨリ影写セシ
モノヽ加茂国氏ニ先祖従五位上任是通
仙院ヨリ賜タルモノヽコトニテソノ家ニ秘惜
スルコト年久シト雖モ一旦衰微セルコトアリテ
良価ヲ以テ沽却セルコトニナリヌ平安畑春文
コレヲ錦小路家ニ之ヲ求メテ備ヘセシメ副本
ヲハ臣ノ家ニ備蔵セリ壬寅冬余コレヲ借得

天保十三年カ

十行　廿字　東京相馬屋製

スルコトヲ得タリ又原本ヲ見ルコト錦小路家ニ乞
シニ朱文ガ家ニ携来シ折節ニ邂逅シテ
親観手展スルコトヲ得タリ針博士ノ手書ナル
ヤ否ハ知ルヘキニ非ズト雖モ小楷遒美蕭條
雅ニテ古色一面掬スヘキモノ七百余年ノ古巻タル
ヿ疑ナシ但由来ノ書中ニ詳悉モアリテ医
心方ハ元是丹家ノ秘書ナリシ
台徳院殿ヨリ通仙院ニ賜ト記シ又任是玄通
シテ通仙院ノ門ニ入ルコトヲ記セシ類皆信ス
ヘカラサルコトシ且三十巻ノ全書ヨリイカニ疑

法ノ雖新アルトモ君子ニ於テハ一キ謂ナシ由
題カ記スル所実ニ疑ナキコトヲ信シテ因テ玖ル
ニ半井ノ門ニ入テ西仙洞ニ親炙シテ秘奥ヲ
傳得テ手写シテ原巻ヲ以ノ本ニ返スコトナク
シテ任足カ世ヲ去リテ孫ニ至リ任蔭シテ逝
ニ本傳ノ物ノ抵ニ心得タルニヤアラン託医
心方ヲ西仙洞璘巣ニ帰リシハ
正親町院ニ至リ篇ニ三年ヨリ璘巣在宅シテ江戸
ニ下リタルコトモキコエズ　（天保十四年）癸卯十二月六日記
大法眼尚徴

十行　廿字　東京相馬屋製